

特別講座 京の庭師に学ぶ「和の庭」素材編

石は「和の庭」に欠かせない大切な要素 その形や表情が、庭のアクセントになります



「和の庭」案内人
つだ ひでお
津田 秀夫
昭和22年生まれ。
東京農業大学農学部造園学科卒業。
株 植清・津田造園同社代表取締役。
平成16年、京都府優秀技能者
「現代の名工」受賞。
現在、(株)京都府造園建設業協会理事。
京都府造園協同組合副理事長。

株 植清・津田造園は明治11年創業。京都府より『京の老舗』として表彰。津田さんで5代目となる。

「北山利和さんの経営する北山都乾園は、京都で石が一番多く取り揃えている石材屋です。種類が多だけでなく、目利きも確かで、ここで石を選ると私好みのものがたくさん見つかるんです」

私・津田秀夫が案内人としてお送りしている「和の庭づくり」のシリーズは、前回に引き続き、庭を構成する素材についてお話ししましょう。今回は庭を構成する素材として「石」を取り上げます。石は、大きな庭石から、砂利、砂にいたるまでさまざまな形や表情をもち、石なくして和の庭は成り立ちません。私の庭づくりのよきパートナーでもあり、代々京都で石材を扱ってきた北山利和さんとともに石の種類や良し悪し、美しい使い方のコツを伝授します。



きたやま としかず
北山 利和
昭和16年11月7日生まれ。
京都府立山城高校卒業。
27歳の時に家業を継ぐ決意をして
現在は 株 北山都乾園代表取締役。

株 北山都乾園は、造園建築石材卸の会社で北山利和さんと4代目。1300坪の敷地には、燈籠だけでも約1000本、その他膨大な種類と量の石材が集積している。

べっぴん「別嬪」「じゃぐれ」とは？

津田 飛び石、石垣、池、砂利、砂、あるいは燈籠やつくばい(手水鉢)など、和の庭は石なしでは成り立ちません。北山さんのところでは、あらゆる庭石を扱ってますよね。

北山 ええ。川石は吉野川や十津川、山石は兵庫や四国から仕入れています。京都の石材屋は産地では嫌われるんです(笑)。石なら何でもいいじゃなくて、選るもんだから。

津田 そして、われわれ庭師も、そうやって仕入れた石から、さらに自分がつくる庭に合うものを選び抜く。何百個あっても、そのなかから一つひとつ選っていきます。

石にも良し悪しがあるんですか？

津田 ありますよ、美しいのとそのでないのが。それに、その庭のイメージに合うかどうかも重要なんです。なかにはまれに、よだれが出そうな「別嬪」の石もある(笑)。

北山 じゃぐれた感じのものなんか、いい味を出しますよね。

「じゃぐれた感じ」というのは？

北山 ゴツゴツとしていて、野趣のある表情をもった石です。表面があまりつるつるになったものは、表情に乏しくてつまらない。

山石と川石で違いがありますか？

津田 山石は重厚で格の高い感じ、川石は野趣があって柔らかい感じがします。「真・行・草」でいえば、山石は真、川石は草。京の庭は川石を使ったものが多いんですが、肩の凝らない「草」の感覚が好まれるからでしょう。でも、どちらもそれぞれに情趣がありますし、建物との相性もあります。たとえば数寄屋造りなら建物が「真」なので、庭石も山石が似合う、というふうに。

燈籠やつくばいは何年も置くんですか？

北山 和の庭は「時間」を眺めるものなんです。だから新(さら)ではダメ。うちの資材置場には燈籠だけで1000本ぐらいい置いてありますが、燈籠やつくばいも3年、5年、7年と時が経って錆びてくるにつれ味が出るし、そうやって初めて商品になるんです。



山積みされた石のなかから、クレーン車で、庭に使う石を選び分ける造園業者。こうして必要な石を選んで買い付けます。



立ち並ぶ燈籠。灯り窓の部分に苔のついた木の皮等を置いて、錆(苔)が早くつくようにしていますが、それでも4~5年はかかります。

主役+脇役でバランスよく配置

石を美しく組み合わせる法則とか、コツのようなものはありますか？

津田 先ほど別嬪の話が出ましたが、別嬪ばかりを並べても、お互いの個性を消し合ってしまう、いい庭にはならないんです。主役があつて脇役がある、そういうバランスを考えて石を選び、配置することが大切です。

北山 飛び石のかたちや組み合わせなんて、本当に上手下手が出ますよね。

津田 そう、これは図面には描けない。石の形はすべて違いますから。現場に置きながら大き

さやバランスを見て、自分の感覚でレイアウトを決めていくしかないんです。

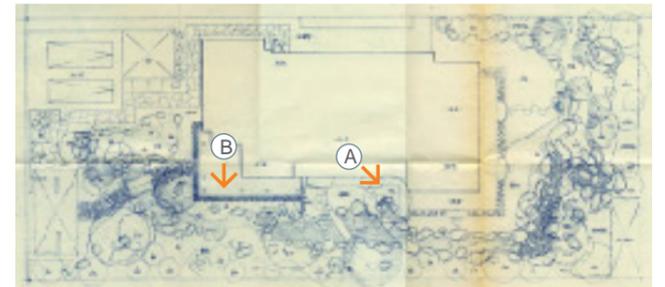
北山 うちの隣は龍安寺さんで、子どものころ自由にあそこの敷地内で遊んでました。京都人には大なり小なりそういった経験があり、それが庭の造形に対する感性を育てるのかもしれないですね。

津田 そうですね。もちろん京育ちでなくても、本物に触れる機会を多くもち、美しいものに感動しながら、つねに感性を磨いていくことが重要だと思います。

津田さんに教わる 石を使った庭のプランニング

滝から渓谷、そして池へ。 水の流れの変化を石で表現

これは個人のお宅です。建物は格式の高い数寄屋造りなので、石も重厚な山石を使用。これが草庵ふうの建物なら、野趣のある川石が調和する...などと、建物と庭の雰囲気合わせる事が大切です。お施主様の要望は「庭に流れと池がほしい」というもの。そこで、建物をぐるりと囲んで滝・川・池をレイアウト。渓谷の険しさを表現するため、高知まで行って山石を探してきました。その甲斐あって、イメージ通りのダイナミックな庭が完成しました。



「人」文字の石がお出迎え

図面の②のアンクルから撮ったもの。訪れた人がちょうど玄関まで来て、ふと横を向いたときに見える光景。川の向こう、左奥に寄り添うように立つ2個の石は「人」という文字を表し、「人様を暖かくお迎えする」という意味も込められています。この石のように、庭石はまっすぐ立てるのではなく、ちょっと傾かせることで風情が出ます。



上の写真と同じアンクルの施工中の写真。奥にそそり立った石を組み上げて滝口をつくっているのがわかります。

渓谷の荒々しさ、池の穏やかさ

図面の①のアンクルから撮ったもの。奥に滝をつくり、そこから渓谷、川、手前の池へとつなげながら、水の流れに変化をもたせています。滝から渓谷は大きな山石を組み合わせ荒々しい感じを出し、水の流れをちょっと暴れさせることでせせらぎの音を演出。渓谷の荒い流れとは対照的に、池の底にはなめらかな那智黒の砂利を敷いて、おだやかさや静けさを表現しています。左側の飛び石は鞍馬石。数寄屋造りの建物に合わせた「真」のイメージです。